



卒業式

3月17日、上高瀬小学校の卒業証書授与式に臨席した。卒業生1人1人が呼名を受けて壇上に上がり、石川節子校長先生から卒業証書を受け取り、下壇して来賓席の前を通り自席へ戻って行く。その姿に何とも言えないじいんとした気持ちになる。

式場から卒業生を拍手で送り出して来賓控室へ戻ると、私の前に着席した河津正幸さんが、私に呟く。

「卒業式はいいですね。私は途中からいつも涙が滲んでくるんです」

「それは正常な人間の証だよ。私も途中で滲んでくる」

私はそんな返事をして式後の爽やかな気分浸ったのだった。

暫くの時を待ってから外へ出て、在校生・先生方と一緒に私等来賓も、桜道（玄関から校門までの数十メートルの坂道、昔は両脇に大きな桜の木が並んでいた）の両脇に並んで、保護者と共に校門へと下って行く卒業生を見送った。保護者が参列するようになったのはいつ頃からだろうか。ふとそんな事を考えている自分に気が付いたのだった。



帰宅して普段着に着替えながら、自分の小学校の卒業式を思い出していた。木造の大きな講堂だった。講堂の前の広い中庭には大きな松の木があったなあ。高橋都栄校長先生、よく憶えている。校長先生は、私たちを送り出して定年退職された。

実はこんなことがあったのだ。高校の教師になって30歳の時に、観音寺商業高校（現観音寺総合高校）から笠田高校へ転勤した。着任して間無しの或る日、校門を出ようとしたら、自転車に乗った老人が通りかかった。その人を一目見て、「あっ、高橋校長先生！」と大きな声で叫んでしまって我に返った。その人は自転車を下りて、「あなたは私を知っているのですか」と言われた。「昭和27（1952）年3月まで3年間、上高瀬小学校の校長先生だった方ではないですか」と意を決して聞いた。「はい、その高橋です」。「私は、豊島馨先生の受持ちの生徒で上高瀬小学校卒業の小野健一と言います。この4月に観音寺商業高校から笠田高校へ転勤してきました」と自己紹介をした。校長先生はとても驚かれて、少しの間立ち話をしたように記憶している。

上高瀬小学校を卒業して開校したばかりの三ヶ村組合立東中学校に入学した。

三ヶ村とは、上高瀬村、勝間村、比地二村である。学校の場所は藤原文具店（開校の時に開店）前の公民館があった所、現在は更地になっている。



入学式は運動場だった。快晴で太陽が眩^{まぶ}しかった。在学中3年間、体育館はなかった。通学はゴム草履か下駄だった。運動靴は未だ普及していなかった。卒業式の日には雨だった。現在の図書館がある辺りかな。そこに煙草の収納所があった。卒業生だけ（50人の5学級）が入って、整列したら、丁度私の前に大きな柱があった。だから、話をされている小野伝五郎校長先生や来賓の方の姿は全く見えなかった。

私達が東中学校を卒業して、4月1日に高瀬町が誕生し、私達の卒業式の会場だった煙草の収納所が高瀬町の仮役場となった。東中学校は高瀬中部中学校に校名変更になった。東中学校は僅か3年間だけの存在だった。

高瀬高校は、昭和23（1948）年5月6日、上高瀬小学校講堂を仮校舎として開校した。当時私は上高瀬小学校3年生だった。4年生の夏休みに、現在地に新校舎が完成して移って行ったのを、登校して（希望者のみ）見送ったからよく憶えている。高瀬町誕生の直後に、私はその高瀬高校へ入学したのである。入学式には父・一郎が来てくれた。未だ体育館は無かった。式場は運動場だった。

快晴だった。國市池の方から吹いて来る強い風で、式場に張り巡らされた紅白の幕のパタパタという音がとても喧^{やかま}しかった。



延地君男校長先生が、入学式の式辞の中で、「高等学校は、しっかりと自覚して自分から進んで勉強する所である」と話されたのを聞いて、高等学校は中学校と違って大変な所なんだと自覚させられた記憶がある。2年生からは川口勇校長先生に代わった。3年生の1学期の終わりに体育館が完成した。体育館へ入ったのは落成式の日が初めて、2回目が卒業式だった。否、卒業式は3回目だった。2回目は、2学期の中間テストの期間中だったと思う。渡辺貞明君と柳生康徳君と私の3人で体育館の横を歩いていて、私が入口のドアを押したら開いたのだ。渡辺君と柳生君が中へ入ったので私も入った。2人は相撲を始めた。突然、体育科の八代先生が現れて「男子の入って来る所でない」と注意され、3人は「すみません」と謝って、その場をすくすくと撤退した。

川口校長先生は卒業式の式辞の中で、「卒業して、難しい問題に直面して、どのように対処するべきかと困り果てた時には、悩まないでいつでも学校へお世話になった先生を訪ねて来なさい」と話されたのが忘れられない。

大百姓の長男である私は、笠田高校の農業科の教師になるのを目標に、東京教育大学（現筑波大学）農学部農学科を受験し、運良く合格して進学した。入学式の会場はバスケットコート一面の広さの木造の狭い古い体育館だった。定員890人の1年生が科毎に名簿順に1列に縦に並んで整列した。朝永振一郎学長の式辞だけで終わりだった。これが大学の入学式かと拍子抜けした。式辞の中で、朝永学長は、「君たち1人1人に、国は年68万円の投資をしているのです。それを1日たりとも忘れることなく本学でしっかりと学び、社会に貢献出来る人間性を身に付けて巣立って行ってもらいたい」概ねこんな趣旨の内容であったが、「68万円」だけは今も脳裏にはっきりと焼き付いている。

4年生の夏休みに帰省して笠田高校へ行って、「笠田高校の農業科の教師になりたいんです」と申し述べたら、応待して下さった年輩の先生が、「定時制の閉校で農業科の教師が余っていて、農業科の採用試験は今年も無いが、ここ数年は無いと思うよ」と言われたのだ。その言葉を聞いた途端に目の前が真っ暗になった。校門を出ようとして、川口校長先生の卒業式の式辞の言葉を思い出し、その足で自転車をこいで琴平高校へ向かった。川口校長先生は、私が高瀬高校を卒業して1年後に琴平高校へ転出されていたからだ。

事務室へ行って来意を告げていると、運の良いことに、そこに川口校長先生が居られ、直ぐに校長室へ通された。

「牧先生のクラスなら、娘の紘子と同じクラスだったんだね。教育大へ合格した生徒が1人居たのは憶えているよ。その小野君ね。よく訪ねて来てくれました」その言葉を聞いて嬉しくなり、突然の訪問をお詫びし、直ぐに来意を告げた。

「理科免は取れる？」

「はい、取れます」

「物理の教師が足りないんだよ。物理で受けなさい」

「一般物理学の単位は取ったけど、余り勉強していないんで物理は無理です」

「試験まで未だ3ヶ月ある。大学受験の物理をもう一度3ヶ月かけて一通りしっ



かり勉強すれば大丈夫、小野君なら受かるよ」

この言葉を真に受けて受験し、運良く合格して観音寺商業高校へ採用されたのである。

昭和37（1962）年3月15日、東京教育大学の私等の卒業式は、付属小学校の講堂を借りて行われた。落語が得意だった朝永振一郎学長ならではの式辞、手元の紙を棒読みするようなことをしない。ユーモアたっぷりに私たちの顔を見渡しながらかし始めたのだ。86歳の今、こんな式辞が真の式辞と言えるのかもと思う。しかし、これは難しい。

最初の言葉「むかし、むかし、ある所におじいさんとおばあさんが住んでいました」を耳にしてびっくりし、壇上の笑顔の学長を見つめた。他の人たちも私と同じ気持ちでなかったかと今にして思う。

「そのまたずうっとむかしにも、おじいさんとおばあさんが住んでいました。そんな大昔に、大きな山火事が起こりました。山に住んでいたブタは、みんな焼け死んでしまいました。当時はブタの肉は生で食べていました。食べるものが無くなったみんなは困ってしまいました。その時、勇気ある1人の若者が、焼け死んだブタを食べ始めました。その若者を見ていた回りの人たちは、空腹に耐えかねて、1人また1人と、とうとう終いには、みんなが食べ始めました。私は、皆さん1人1人が、この勇気ある若者になってもらいたいのです。……」その後、勇気について具体的に話されました。



「東京教育大学 学長 朝永振一郎」と署名入りの卒業証書は私達の学年が最後であった。

朝永振一郎 1906（明治39）年3月31日生まれ。

1979（昭和54）年7月8日逝去。

1956（昭和31）年から1962（昭和37）年まで東京教育大学学長。

1965（昭和40）年ノーベル物理学賞受賞。

京都大学で同級生の湯川秀樹博士に次いで日本人2人目。

（令和8年4月1日）